鎮魂歌

不夜城Ⅱ

a requiem

HASE SEISYU

kadokawa-shoten

馳星周

角川書店

鎮魂歌

不夜城 II

a requiem

HASE SEISYU

kadokawa-shoten

馳星周

角川書店

馳星周（はせせいしゅう）

1965年2月北海道生まれ。横浜市立大学文理学部卒業。出版社勤務を経てフリーに。別名義で書評、文芸評論を発表しながら、執筆活動に入る。デビュー作『不夜城』は96年度様々なミステリーランキングでベストワンに選出され、第18回吉川英治文学新人賞を受賞した。

鎮魂歌（レクイエム）―不夜城II―

平成九年八月三十一日　初版発行

著　者――馳　星周

発行者――角川歴彦

発行所――株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒102　振替〇〇一三〇―九―一九五二〇八

電話／営業部〇三―三二三八―八五二一

編集部〇三―三二三八―八四五一

印刷所――旭印刷株式会社

製本所――株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Hase Seisyu 1997　Printed in Japan

ISBN4-04-873070-3　C0093

鎮魂歌（レクイエム）―不夜城II―

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あいつは頭の単純な、血も涙もないモンスターなんかじゃなかった――本当はまっとうな人間だったはずなのに、どこかですっかり狂っちまったんだ。ほとんどはあいつの自業自得だった。それは認めるよ。でも全部が全部あいつのせいじゃなかった。そんなことあるものか。

『心臓を貫かれて』
マイケル・ギルモア
村上春樹・訳

装丁／高橋雅之
写真／久山城正

黒い夢を見る。真っ黒な闇の中、おれの傍らに女が寝ている。おれはただその女を見つめている。女には顔がない。黒く塗り潰されている。

小蓮。おれは小蓮の顔を思い出せない。写真すら持っていない。

小蓮。おれが殺した。楊偉民が殺させた。

たったひとりのおれの女。おれと同じ世界に生きていたたったひとりの女。

小蓮は顔を失って眠っている。失くした顔でおれに訴える——なにかを。

小蓮が死んだ。歌舞伎町が変わった。北京の崔虎が力をつけた。ボスとナンバー二を失ってばらばらに散っていた上海の連中も新しいボスを得てまとまりはじめた。いまじゃ、歌舞伎町は崔虎と朱宏——上海の老板のものだ。二人で仲良く餌を分けあっている。互いの腹を探りながら。

そして、楊偉民。楊偉民だけは変わらない。おれに小蓮を殺させた夜、やつはしこたま儲けた。汚れた金、血まみれの金——金は金だ。楊偉民は崔虎と朱宏を上手に手なずけている。その金を使って。おれも金を貯めた。汚れた金を。

黒い夢を見る。小蓮がおれに微笑みかけることはない。おれはただじっと、小蓮を見つめている。ぴくりとも動かず、おれは小蓮を見つめている。

黒く塗り潰された顔。なにかを訴えている。だが、それが形になることはない。顔すら思いだせない小蓮を、おれは見つめている。

そうやって、身体の内側に冷気が溜まるのを待っている。

楊偉民を殺すために。小蓮との約束を果たすために。

1

楊偉民から電話があった。雪の札幌から、生暖かい風が吹く東京への呼び出し。一年振りの新宿。
郭秋生（グォチウション）は旅行ケースに荷物をつめ、千歳（ちとせ）へ向かった。

＊　＊

羽田からはタクシーを使った。四谷のマンションはきれいに掃除されていた。楊偉民が家賃を払い、しっかり管理していた証拠だった。秋生は冷蔵庫から冷えた烏龍（ウーロン）茶の缶を取りだし、ベッドに腰かけた。なにもすることがない。旅行ケースから本を取り出した。擦りきれた犬の図鑑。何度眺めても飽きることがない。いつか、必ず犬を飼う。

烏龍茶が空になった。図鑑は最後のページ。もう一度はじめから読み直した。アイリッシュ・ウルハウンドの写真が目に飛び込んできた瞬間、電話が鳴った。

「楊偉民（ヤンウェイミン）だ。一時間後に香妃園で」

電話が切れた。久しぶりに耳にする台湾語だった。楊偉民が相手でなければ使うこともなくなった。

秋生はシャワーを浴びた。

＊　＊

楊偉民は先に来ていた。個室に案内され、楊偉民の向かいに腰を下ろした。すぐに料理が運ばれてきた。

「元気だったか？」

「元気だったよ」

会話はそれだけで終わった。秋生は黙々と食べた。楊偉民は視線を秋生に向けたまま茶をすすっていた。

「北京のやつらだ」

秋生が食べ終えると、楊偉民がまた口を開いた。

「何人？」

「わからん……」

楊偉民が紙片を滑らせてきた。住所と部屋の番号が書かれていた。マンションの住所は大久保だった。頭の中の地図で場所を確認した。

「明日の夜、十一時。そこにいる人間すべて」

「道具は？」

「まかせる」

「人数がわからないなら、銃がいい」

「今夜中に届けさせる」

「終わったあとは？」

「四谷にいればいい」

それ以上聞くことはなかった。楊偉民が封筒をテーブルの上に置いた。金が入っている。百万はありそうな分厚さだった。秋生は封筒に手を伸ばした。御馳走さまもいわずに個室を出た。

＊　＊

四谷のマンションに戻って犬の図鑑を眺めた。飽きることはない。

アイリッシュ・セッター、アフガン・ハウンド、ジャーマン・シェパード、ドーベルマン、ピット・ブル……どこか山奥で犬と暮らす。それだけを夢見て生きてきた。

玄関で物音がした。人が立ち去る気配があった。郵便受けに包みが落ちていた。厳重に梱包された黒星——中国製のトカレフ。弾倉が三つ。弾丸五十発。

黒星を分解し、また組み立てた。弾倉を押しこむ。黒星が生き返った。黒星をテーブルの上に置いて、秋生は犬の図鑑に目を戻した。

＊　＊

人いきれをかきわけた。アルコール、胃液、小便の混じった匂い。ざわめき、静寂、ざわめき。ネオンの明かりと暗闇——暗闇を選んで歩いた。歌舞伎町から職安通りを渡って大久保へ向かった。

ホテル街に入ると売女たちの視線が飛んできた。金髪のコロンビア、褐色の東南アジア、そして、とうの立ったおカマたち。群れ、孤立しカモを待っている。売女の影でポン引きやヒモが息をひそめている。売人もいる。だれも秋生には声をかけない。気がつきもしない。

紙切れに書かれたマンションを見つけた。中に入ると空気が変わった。エレヴェータは使わず階段をあがった。手袋をはめた。耳に綿をつめた。黒星を抜く。弾丸を薬室に送り込む。

乾いた金属音が響いた。

ジャケットのポケットに入れた予備の弾倉を確かめた。使うことはないだろう。

秋生は五〇四号室の前に立った。表札はない。ドアをノックし、待った。

「なんだ？」

北京語が聞こえた。

「崔虎の兄貴に頼まれたお届けものです」

卑屈な声で答えた。間があって、シリンダーの回る音がした。ドアの隙間に手を突っ込んで思いきり引いた。怪訝な顔の男。そいつの腹を蹴って部屋の中へ飛びこんだ。

一DKの部屋に男が三人――一人は腹を抱えてうずくまっている。他の二人は小さなテーブルを挟んでなにかを仕分けしていた。

「てめえ、どこのもんだ!?」

「なんの真似だ?」

右の男を撃った。頭が弾けて血と脳漿が飛び散った。左の男が腰を浮かした。銃身を振って引き金を絞った。男が真後ろに吹き飛んだ――テーブルの上のものを撒き散らしながら。

股間が熱い。固く猛っている。

「上海の豚野郎……」

ドアを開けた男が足にしがみついていた。蹴った。男は仰向けに転がった。撃った。男の身体が痙攣した。

「おれは台湾人だ」

秋生は台湾語で静かにいった。残りの弾丸を三人にぶち込んだ。血と肉とプラスティックのカードが舞った。カード――パチンコのプリペイドカードだった。

＊　＊

売女、ポン引き、売人、酔っぱらい、ガキども、ミニスカートの女たち、客引き、やくざ、流氓、おまわり。歌舞伎町の真ん中を突っ切った。腰に黒星。ポケットに薬莢。靴には血痕。勃起した男根。

だれもなにもいわなかった。

マンションに戻り、シャワーを浴びた。冷えた烏龍茶と犬の図鑑を手に取った。あるのはそれだけの部屋。他に必要なものはなかった。

秋生はうっすらと笑みを浮かべて犬の写真に見入った。

2

「話がある。今すぐ出てこい」

「わかりました」

下手な北京語を受話器に送り込んで、滝沢誠は電話を切った。酷い二日酔いだった。頭がぶよぶよに膨らんでいる。冷蔵庫のミネラルウォーターをあおった。

「電話、だれから?」

ベッドから宗英の声がした。布団がずり落ちたベッドの上で裸体をくねらせていた。

「おまんこぐらい隠せ、馬鹿が」

ベッドは乱れていた。ゴム紐、鞭、蠟燭、バイブ。昨夜を思い出して股間が疼いた。頭が痛んだ。胸焼けがした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「だれからなの……女？」
「崔虎からだ。用事があるらしい」
「お金になればいいね」
「そうだな……」
滝沢はベッドの縁に腰を下ろし、宗英の手首をさすった。鬱血した肌。所々に蠟がこびりついている。林宗英――北京からやって来た。不細工だが、滝沢を嗤ったりはしない。崔虎――新宿を根城にする北京の流氓どものボス。だれも崔虎を嗤ったりはしない。まともな神経の持ち主なら、崔虎に近づこうとはしない。
金。要するに金だ。ここのところ、毎日のように杜から催促の電話がかかってくる。
おっかない虎の口。とんでもない牙が生えている。その中に飛び込まなければ金は手に入らない。
「とにかく、出かけてくる」
滝沢は着替え、部屋を出た。宗英は素っ裸のまま手をふっていた。

＊　＊

不機嫌な顔が滝沢を出迎えた。天楽苑という名のしけた中華屋だった。崔虎にはそぐわない。だが、崔虎は昔からこの店を使っている。
崔虎は店の真ん中のテーブルに腰を据えて麵をすすっていた。こめかみの血管が浮き出ていた。周りには取り巻きのチンピラがいるだけだ。幹部連中の姿は見えない。滝沢は崔虎の向かいに腰を下ろした。
「昨日、うちのやつらが三人殺られた」
それを待っていたように崔虎が口を開いた。きれいな北京語だった。通訳なしでも意味をつかむことができる。
「だれですか？」
殺し。予想にはなかった言葉だ。背中がチクチクした。
「張の野郎だよ。後の二人はどうでもいい」
張道明。顔が脳裏に浮かんだ。北京の四大天王の一人。金の扱いがべらぼうにうまい。
「やったのは上海のやつらですかね？」
「決まってるだろうが」崔虎が吠えた。「他にだれがいる、え？」
「どういうことなんですか？」
「張はパチンコのプリペイドカードを仕切ってた。おれはそっちのことは全部あいつに任せてた。大損だぜ」
「そりゃそうでしょうけど、おれになにをしろと？」
「張のやつらがあの日のあの時間にあの場所に集まるってことは身内しか知らねえことなんだ」
滝沢はそっと舌打ちした。

「身内を上海に売った裏切り者がいるってこった。どう思う、え？」
「なんとかしなきゃなりませんな」
「おまえになんとかしてもらいてぇんだよ」
「無理だ」
「無理なもんか。おまえ、元刑事だろうが。日本のおまわりは優秀だって話だ」
「それとこれとは……」
「おれの頼みが聞けねぇってのか？」
滝沢は口を閉じた。頭の中では天秤が揺れていた。崔虎が与えてくれる金と恐怖、それに不便、不快な思い。金と恐怖が勝った。いつだってそうだ。
「どうしてほしいんですか？」
「裏切り者を探し出して、おれの前に連れてこい」
「心当たりは？」
「夕べ張がなにをしてるか知ってたのは、おれと魏、陶、陳だけだ」
魏在欣。陶立中。陳雄。三人とも崔虎が育て上げた流氓の精鋭だ。張道明を入れて四大天王と呼ばれていた。
「まさか……」
「おれだって信じたくはねぇ。だが、それ以外考えられねぇんだ。この内の誰かが上海とつるんでる。あるいは、楊偉民のクソ爺とだ。ぶっ殺してやる」
崔虎がだれかを殺すといったら、必ずだれかが殺される。間違ったことをしたやつ。あるいはヘマをしでかしたやつ。ヘマをする方にだけはまわるな。滝沢は自分にいい聞かせた。
「通訳代わりになる男をつけてやる。好きに使っていいぞ」
貧相な男が奥のテーブルから腰をあげた。崔虎は麺をすすりはじめた。話は終わったのだ。滝沢は慌てて口を開いた。
「老板、人から話を聞くには金がかかる」
崔虎の目が冷たく光った。掌にじっとりと汗が滲んだ。待つこともなく崔虎がうなずいた。
「裏切り者を見つけたら二百万、くれてやる。それとは別にこれを持っていけ」
鰐革の財布がテーブルの上に無造作に投げ出された。滝沢は手を伸ばした。厚みを探った——五十万はありそうだった。

3

〈薬屋〉に電話を入れる時間だった。

「はい？」
日本語が聞こえた。
「秋生だ」
秋生は北京語でいった。
「昨日はご苦労だった」
「それで、どうすればいい？　また札幌か？」
「いや。しばらくはそのマンションで暮らしてくれ」
動悸がした。今までこんなことはなかった。殺す。姿を隠す。それが変わらぬパターンだった。
「おれ、ヘマをしたか？」
「そうではない。今回は少々込み入っている。またおまえを必要とするかもしれない」
「その時にまた戻ってくる」
「だめだ。おまえはそこにいるんだ」
「老爺、おれは――」
「わかったのか？　おまえはそこにいて、わしの連絡を待つ。必要なものがあればいえ。届けさせる」
「老爺――」
「心配するな。すべてわしに任せておけばいい。おまえの悪いようにはせん」
電話が切れた。

＊　＊

犬の写真も目に入らなかった。胸の裡で不安と恐怖が渦巻いていた。なにが起こった？　楊偉民はおれになにをさせようとしている？
わからなかった。不安だった。恐かった。殺しの現場ですら感じたことのない感情に身体が震えた。身体の芯が凍えている。思考が千々に乱れた。
秋生は目を閉じた。女の顔が脳裏に浮かんだ。
「真紀……」
真紀の手が秋生の頬を打擲する――中国人の癖に生意気なんだよ。風呂上がりに覗いた真紀の裸身。輝いていた。そして、あのろくでなしに犯された真紀。あそこから白濁した精液が溢れていた。それを見て、欲情した。我を失った。
真紀を愛していた。真紀は蔑んでいた。台湾人の秋生を。日本語をうまく話せないからという理由で血の繋がらない弟を心の底から憎んでいた。
真紀はもういない。死んでしまった。鬱血した顔。迫りでてくる眼球。血――飛び散る血と脳漿。大久保のマンション。昨日の殺しが頭の中のスクリーンで再現された。

震えが大きくなった。
こんなはずではなかった。いまごろは新幹線か飛行機に乗って犬の図鑑を眺めているはずだった。殺しのことはすっかり忘れて。
秋生は目を開けた。ズボンのポケットからナイフを取り出した。よく手入れされたスウィッチブレイドを広げ、鋼に映る自分の顔に見入った。血の気を失い、脂汗に濡れていた。唇を噛み、ナイフを枕に突き立てた。何度も何度も。鋼に映った自分の顔をこそげ落とすように。
それでも震えはとまらなかった。
秋生は震える身体を持て余しながら、死体のような足取りで部屋を出た。

4

「おれはどうしたらいい？」
男の額に汗が浮いていた。蔡子明。滝沢の通訳兼使いっぱしりに崔虎がよこした男だ。街で何度か見かけたことがある。日本語ができることを鼻にかけているが、地位も度胸もない。いつもヘラヘラ笑って上の連中の顔色を窺っている。要するにチンピラだ。
「連絡先を教えろ。用ができたら電話する」
「崔虎の兄貴に、滝沢さんにくっついてろっていわれたよ」
「連絡先だ」
滝沢は蔡子明を睨みつけた。言葉遣いと態度は卑屈だが、目はなにかに飢えて光っている。こんなやつを信用するわけにはいかない。やっかいなやつを押しつけられた。
蔡子明は目をそらし、電話番号を口にした。携帯電話――流氓ならだれでも持っている。番号を頭の中に叩きこんだ。
「じゃぁな」
滝沢は手を振って蔡子明を置き去りにした。
滝沢は部屋へ戻った。宗英の姿はない。恐らく華聖宮にでも行ったのだろう。欲の皮が突っ張った台湾の老婆がやっている寺院だ。わけのわからない神様を祀ってお布施と称する金をふんだくる。なにが嬉しいのか、宗英は毎朝お参りにいってなにがしかの金を捨ててくる。
ベッドはきちんとメイクアップされていた。昨夜の痴態の面影もない。縄で身体の自由を奪われ、あそこに張形を突っ込まれて苦痛に顔をしかめる宗英。鞭と蠟燭を手に息を荒げる滝沢――頭の中にすべてが甦った。昨夜

は久しぶりに時間をかけて宗英をいたぶった。しこたま酔っていた。そうしなければ、股間のものが役に立たなかった。

倦怠感が日ごとにひどくなる。中国の流氓に顎で使われる毎日。中国の金貸しにはした金を催促される毎日。だが、出口はどこにもない。

キッチンのコンロに鍋がかけてあった。中を覗いた。鳥粥だった。あたためて食べ、電話をかけた。

「鈴木だが」

「おれだよ、滝沢だ」

「おまえか。なんの用だ？」

「昨日、大久保で殺しがあっただろう。中国人三人が殺された」

「なにか知ってるのか？」

とたんに、鈴木の声が用心深くなった。

「いや、なにも知らない。どうも、殺されたうちの一人が女房の知り合いらしいんだ」

「もっとうまい嘘にしろよ」

「話を聞かせてくれ。情報が欲しいんだ」

滝沢は開き直った。鈴木は昔、コンビを組んでいた相手だった。性格も癖も知り尽くされている。

「馬鹿いえ。おれにデカやめさせたいのかよ」

「五万だ。悪いバイトじゃないだろうが」

ため息が聞こえた。滝沢と鈴木はいいコンビだった。二人とも金に汚かった。

「今夜、十時。宮田の店で」

「恩に着る」

滝沢は電話を切った。服のまま清潔なベッドの中に潜り込んだ。

＊　＊

二年前。滝沢は新宿署防犯課――いまでは、生活安全部保安課という名前に変わっている――の刑事だった。コンビを組んでいたのは鈴木正光巡査部長。二人で歌舞伎町を練り歩き、売春婦、ポン引き、やくざ、売人を痛めつけ、たかって生きていた。

旗色が変わったのは三年前だ。ただでありつけるセックスを求めて、区役所通りの裏手にある中国人バーに入った。タイやフィリピンの褐色の肌はごめんだった。日本人相手では気を遣わなきゃならないことが多すぎる。タイもフィリピンも日本も手荒に扱えば駄々をこねる。だから中国娘を求めた。顔はほとんど日本人と変わらないが、言葉が違う。多少乱暴に扱ってもどうということはない。やることをやって、それでおしまいだ。

勤務外。だが、内ポケットに警察手帳が入っていた。店を仕切っている中国人は露骨に顔をしかめた。それでも、警察手帳を無視することはできなかった。滝沢を怒らせれば手入れを食らう。

男が連れてきたのが宗英だった。店で一番ブスな女を連れてきやがった。宗英を見た瞬間、滝沢は舌打ちした。それでも、文句はいわなかった。なんにせよ、ロハなのだ。あそこさえちゃんとしていれば、文句を垂れる筋合いはない。

その夜から、滝沢は宗英に溺れた。はじめは恐る恐る、そして徐々に大胆になっていく滝沢の暴力的なセックスを、宗英は厭わなかった——浣腸とアナル・セックスを除いては。片言の北京語と日本語で交わされる欲望の宴。

宗英はいった。

「父さんにはいつも撲たれてた。それに比べれば、あんたは優しいよ」

それまで付合いのあった女たちは、縄を持ち出しただけで滝沢を罵った。裏の世界に顔を知られている防犯課のデカともなれば、SMクラブに出入りすることもできなかった。宗英と出会ってはじめて、滝沢は自分の昏い欲望を満足させることができるようになった。宗英の心と身体に、滝沢は執着した。昼も夜も、考えるのは宗英との秘め事だった。

そして、崔虎。宗英が勤める売春バーには崔虎の息がかかっていた。崔虎から連絡があったのは、宗英と出会って三ヶ月目のことだ。

崔虎は、うちの商品に傷をつけてもらっちゃ困る、といった。そういう趣味を満足させたいなら、そういう店へ行け、と。どうしてもうちの商品がいいというなら、買い取れ、と。ただし、うちの商品は金じゃ売れない。情報と引き換えだ。

でたらめだ。宗英はまともな商品じゃなかった。父親に殴られつづけたせいで鼻が潰れていた。殴られて折れた歯の治療を受けさせてもらえなかったせいで、歯並びがぐちゃぐちゃだった。こんな女を買う日本人がいるとしたら、変態だけだ。

滝沢は変態だった。倒錯者だった。身体の自由を奪い、蹂躙し、許しを乞わせる。暴力衝動が癒される。身体が震える。頭の中がスパークする。

だから、崔虎のイヌになった。中国マフィアに関する新宿署の情報をすべて崔虎に流した。宗英は売春バーから身体を売らない飲み屋に勤めを変えた。顔はともかく、その気立ての良さと歌のうまさで、宗英はまずまずのホステスとして新たな人生を歩みはじめた。ねぐらは滝沢

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com